哲學

藤井義夫
馬場啓之助

われわれが「一橋の哲學」について語ろうとするとき、最初にわれわれの脳裡に浮ぶ書物は恐らく左右田喜一郎博士の『經濟哲學の諸問題』や『文化價値と極限概念』などであろう。一九二〇年代から三〇年代にかけてこの學園に學んだ學生で、彼らが社會科學の、いな、ひろく學問のよって立つ學問性を反省しようとの意欲を見失わなかった限り、これらのすぐれて新カント學派的な書物の影響を受けなかったものは稀であった、とさえ言えるのではあるまいか。事實筆者もまたこれらによって哲學の世界に開眼された一人であった。左右田博士がわれわれの學園に言葉の嚴格な意味での哲學への關心を喚起した最初の人であり、カント的な志向に則って、哲學の課題をなによりも經驗科學としての經濟學の認識論的基礎づけの方向に置き、そこから出發して左右田哲學――今日われわれに耳慣れている西田哲學という言葉を最初に用いた人は外ならぬ左右田博士であった――と呼びうるほどの獨創的な高い境位を拓かれたことは、周く人の知るところであろう。そしてこの學統を繼ぎ、そこに殘された問題をさらに發展させたのが杉村廣藏博士であり、またやゝ異る視點からではあるが、同じく經濟哲學の問題に慧敏な斧鉞を加えたのが本多謙三氏であったことも後說の如くである。

またリッケルトの主著『認識の對象』の譯者であり、『現象學敍說』や『存在の現象形態』などの著者として知られている山内得立博士は、現象學的ないし存在論的立場に立って、著しく認識論的なそして形式主義的な新

カント派的立場への反省と批判とを促した人であり、左右田博士と並んで、「一橋の哲學」を想う者の忘れることのできない人である。そしてわれわれはこゝにはからずも「新カント學派から現象學派へ」という、その時代のわが國の哲學的思潮を兩博士によって如實に知りえたことになる。

もちろんこの外にも一橋の講壇に立った著名な哲學者は尠くない。たとえば天野貞祐博士（大正一〇―一二年）、田邊元博士（大正一〇―一四年）、紀平正美博士（大正六年―昭和八年）、高坂正顯博士（昭和一二―一六年）などがそれである。そしてこれらの人々がそれぞれの立場から一橋の學生の哲學的啓蒙に盡瘁せられたことも確かであろう。けれども「一橋の哲學」の確立と育成とは主として左右田喜一郎、山内得立の兩博士およびその流れを汲む人々によって爲し遂げられたのであって、從ってわが學園における哲學の傳統とその推移の迹を顧みるとき、われわれは　一、左右田博士による經濟哲學の定礎および其の展開、二、山内博士による新しい哲學體系の樹立およびその發展の二つの段階を分節して論ずることが便利であろう。（藤井）

一

1　左右田哲學

經濟哲學は經濟學的認識の可能なる所以を究明するとともに、その認識の對象たる經濟文化の意味を解明することをその課題とする。この問題領域の開拓につとめて、この分野における最初の體系理論を創立したのは左右田喜一郎博士である。

大正二年七月、九年にわたるヨーロッパ留學の旅を終えて歸國した博士は、同年十二月東京高等商業學校講師（のちに東京商科大學講師）となった。こえて大正四年九月東京高等商業學校創立四十周年にあたつて、「カント認識論と純理經濟學」と題する記念講演を行い、明確な意圖のもとに、經濟哲學の開拓に向って進む態度を表明した。これは經濟哲學にとっても、また一橋の學問にとっても歴史的な事件であった。續いて「經濟學認識論の若干問題」（『經濟論叢』一ノ三〜四所收）、「經濟政策の歸趨」（『社會政策學界論叢』九所收）、「經濟哲學の問題」（『哲學研

究』五所收）などを發表し、博士のいだく經濟哲學の構想はしだいに形を整えた。これら一連の論稿をあつめて、大正六年『經濟哲學の諸問題』（二版大正七年、三版大正八年、改刷初版大正一一年、同再版大正一一年）として公刊された。ここに經濟哲學における左右田學說が最初の體系化をみた。それを解說しよう。

　左右田博士にとって、經濟學的認識の問題は經濟的經驗の意味を明らかにするにある。ところで經驗というのはたんに無意味な行爲の繰り返しではなく、主體の意識によって概念的構成をあたえられたものでなくてはならない。したがって經驗は認識以前の素材ではなく、認識とともに成立する。認識はたんにあたえられた對象を意識に模寫するのではなくて、概念的構成を試みることによって認識の對象そのものを可能にするものである。これはカントがその『純粹理性批判』において確立した認識批判の方法によったものであり、左右田博士はこの方法を經濟學的認識の批判に適用せんとしたのである。

　ところで經濟的經驗は明らかに歷史社會における人間の行爲に卽して形成されたものである。それは歷史の過程において人間の社會的協同をまって形成される。しかもそれが「一抹の煙」のごとく時とともに跡方もなく消え去るものであっては、もとより經驗としての意味をもちえない。時の流れに棹さして、しかもなおよく時をこえた意味をもたなくては經驗とはいえない。左右田博士は經驗の意味を支えるものを求めて、文化創造の價値意識に行きついた。文化價値の實現という規範があってこそ、初めて社會的協同も可能であり、また歷史の形成も可能になるのである。しかし文化は認識をはなれてあるものではなく、あたえられた素材のうちに文化創造の營爲を認め、文化價値を認識目的として概念的構成を試みて初めて摑まれるのである。認識と經驗とは別の事柄ではない。認識が文化價値を中心とした目的論的構成を企てるから、歷史的經驗の意味が文化創造として摑まれるのである。

　左右田博士はカントの『純粹理性批判』の方法を繼承したが、その認識論においては目的論的意識を强調することになって、むしろ『判斷力批判』を據點として『純粹理性批判』の方法を再構成したといってもよい。これ

は新カント派の一流派をなすドイツ西南學派、とくに左右田博士が滞獨中深く傾倒したリッケルトの影響をうけたためである。リッケルトの門下からM・ウェーバーやトレルチのような社會科學方法論上に偉大な業績を殘した逸材が輩出したが、左右田博士はかれらと思想的源流をともにするものである。

經濟的經驗とは經濟的文化價値の實現の過程に他ならない。ここで文化價値一般を經濟的文化價値として限定する「經濟的」という契機は、左右田博士にとっては、貨幣概念に他ならない。博士はその青年期において貨幣價値論の研究を企て、その Geld und Wert. Eine logische Studie. (Tübingen 1909, 2 Aufl. 1924) において、貨幣の職能を「價値の客觀的表彰」に求め、これの成立の論理的要件を經濟主體の評價作用の分析を通じて明らかにしようとした。その評價過程の客觀化につれて、評價そのものの論理的前提となっているアプリオリたる貨幣概念がしだいに顯在化してくるとみた。そして貨幣概念によって統べられることによって、經濟的經驗の範域が明確になるとして、經濟學認識論において貨幣概念中心說を說えた。文化價値主義と貨幣概念中心說とは相集って左右田博士の經濟哲學說を形成した。

貨幣概念によって限定された文化價値が經濟的文化價値であり、これを實現せんとするのが經濟的經驗である。ただし實現といっても、文化價値は形成的な理念であり、それは完全に實現するわけではなく、ただ經濟的行爲はこの理念による目的論的統一をあたえられるがゆえに、經濟的經驗たる意味をもつというのである。經濟的行爲は手段の系列であり、經濟的文化價値に向って漸近せんとして手段は層々と積み重ねられていくが、遂にこれに到達することはない。それは無限追求の過程と認識目的たる文化形式との關係の究明は、文化哲學上の基本問題である。この問題を取上げることによって、左右田博士の研究は經濟哲學の領域を突き破って、廣く文化哲學の領野に擴充されてゆき、そこに左右田哲學とも呼びうる境地が拓かれた。

左右田哲學は、「極限概念としての文化價値」(『哲學研究』二四所收)の提唱に、その展開の第一歩を踏みだした。文化價値と社會的行爲の關係を目的と手段との關係

とみ、これを無限級數の例をかりて、極限値と數系列の關係をもって説明せんとした。この「極限概念の哲學」は文化價値による社會的行爲の目的論的合理化の過程を究明せんとしたもので、「合理性對非合理性の問題を通じて觀たる極限概念の哲學」（『哲學研究』六〇〜六三所收）にいたって奥深い展開を示した。しかもこれと竝んで、文化價値による社會的行爲の合理化過程そのもののもつ非合理性に注目し、文化の特殊化の原理を追求することになって、「價値の體系――文化價値と『創造者價値』」（『哲學研究』四四〜四五所收）の問題が取上げられた。

文化價値は、その内部に經濟的とか政治的とかいった特殊文化價値へ特殊化していく契機を潛めて、ひとつの體系を形成する。人間はその社會的行爲の協同を通じて、これらの特殊的文化價値に參入する。けれども人間のもつ人格性の絶對的要求は、社會的協同を通じて文化價値に結びつくことで充されるものではない。社會的協同は手段化された社會的行爲の結合のうえに展開されるが、それによっては本來手段化するをゆるさない人格性の要求は充さるべくもないとみて、左右田博士は文化目的の追求とは別に、人間目的の追求を考えないわけにはいかなかった。そこに目的の二元性をみ、文化目的にこたえる文化價値の他に、人間目的にこたえる「創造者價値」を考え、文化價値と創造者價値を同時に充たすような協同社會の形成の可能性を檢討することになった。「文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理」（横濱社會問題研究所編『新カント派の社會主義觀』所收）は、その究明の跡を記録しているが、論旨はむしろ懷疑的であった。この論稿が發表されたのちいくばくもなく、左右田博士は病沒している（昭和二年）。

2　杉村學説

左右田哲學は「極限概念としての文化價値」と「價値の體系」との二つの問題を中心として、文化哲學の體系理論を構築せんとした。二つの問題のうち、前者は文化認識論の問題であり、後者は文化形而上學の問題である。左右田門下の鋭才、杉村廣藏博士（東京商科大學助教授）と本多謙三氏（東京商科大學豫科教授）とは、いずれもこの二つの問題を再び經濟哲學の體系のうちへ凝集して展開しようと企てた。二人の後繼者はその師より問題を

繼承したが、これを展開する方法については自ら別個の工夫をこらした。

本多氏は經濟學認識論の展開にあたって、現象學的方法を適用せんとしたが、のちに唯物辯證法の影響をもうけることになった。本多氏は鋭敏な論理的分析力と新鮮な感受性をもって、問題の展開につとめたが、病弱のため、逞しい體系の構築にいたらず、數篇の論稿を殘して、夭逝した（昭和十三年）。かれの經濟哲學に關する論稿はあつめられて、『經濟哲學序説』（昭和二十四年）となっているが、既刊の論稿と未定稿を收録したもので、その構想の全般をうかがいがたい。要約的な解説はさけたいと思う。

杉村廣藏博士は左右田博士の問題を受繼いで、經濟哲學における第二の體系理論を構築した。ここでは左右田博士以後の問題の展開を、杉村學説を中心として解説する。

左右田博士は經濟學認識論において認識目的としての經濟的文化價値を强調した。いかにしてかかる認識目的がたてられるかといえば、これなくしては、經濟的經驗が恰も「波濤の去來にも似て」無意味な行爲の繰り返しにすぎなくなる。自らの經驗をもって無意味なりとみることに安んじないのは、そこにすでに價値意識が働いているためである。説明は直截簡單のようである。しかし問題は、いぜんとして殘される。認識目的と行爲主體との關連は、主體の行爲の動機づけの作用を分析することなくしては解明されないであろう。左右田博士は行爲主體たる人間の主體性を人格の絶對的主張のうちに求めた。人間を人間性そのものとして捉え、これを手段化をゆるさないものとみた。ところで行爲は明らかに手段化されたものであり、特殊化された目的を追求するものである。かくては主體の人格性と特殊目的を追う行爲とのあいだの關連は捉え難くなるのは當然である。その關連を明らかにするには、媒介項が必要である。それが動機づけの原理に他ならない。左右田博士が認識目的としてたてた形式的な價値理念を、主體の行爲の動機づけのはたらきのうちに求めようとしたのが、杉村博士である。

博士は、その『經濟哲學の基本問題』（昭和十年）において、經濟的行爲の動機づけの原理を明らかにするにあ

たって、新カント派の一流派であるマールブルグ學派の方法論をかりて、メンガーの經濟性の原理に獨自な解釋を加えることによって、この問題にこたえようとした。マールブルグ學派の方法論によれば、行爲系列が連續化してあらわれるのは、超越的な理念的目的が立てられるためであるよりも、むしろ行爲のおこる根源にいわば「永遠の課題」とも呼ぶべきものが潛んでいるためである。この永遠の課題を「根源の無」と呼び、圖式的には微係數をもって捉えうるとみた。杉村博士はこの論理をもって經濟主體の動機づけを解明せんとした。經濟的行爲は經濟性の原理に從い、圖式的には限界效用均等則などの法則に則ってあらわれる。ところでたとえば限界效用の均等があてはまる前提としては、經濟性の原理に從って經濟財を一定の價値系列に系列化しなくてはならない。この系列化のはたらきを杉村博士は數系列をかりて説明する。自然數の系列、$1, 2, 3, \ldots, n$ が成立するのは、$0+1, 0+2, 0+3, \ldots, 0+n$ というように、0からみての關係の比をもととして各項が系列化されるからである。數系列を成立せしめるものは根源の無との關係の比にあるのだ、經濟的評價にあっても財の系列化を支えるものは零價値である。この零價値は、メンガー理論についていえば、いかなる選擇も働かないような靜止點というのが、それにあたる。あらゆる價値評價はこの靜止點との關係において定められる。メンガーをかく解釋することによって、杉村博士は經濟的行爲を支える內面の論理を明らかにしえたとなした。かかる經濟的行爲の價値系列が重層的に積み重ねられて經濟文化の概念的構成ができる。

　經濟文化は他の文化とともに文化の重層的な構成に入り込んでいる。杉村博士は文化の構成に三つの次元を區別した。第一は、行爲の界であり、ここでは協同の原理に從い、社會的普遍性（一般性）をもった社會的文化が成立する。經濟は言語・慣習・交通・世論・法律・政治などとともに、社會的文化を形成する。第二は人格の界であり、自覺の原理に從い、歴史的相對性（特殊性）をもった歴史的文化が成立する、世界觀・倫理・教育・學問・宗教・藝術などがこれに屬する。第三は個性の界であり、ここでは個性的絕對性を求めて、創造の原理に從

い、個性的文化が成立する。これは天才的な創造のうちに具體化される。左右田博士の價値の體系は、杉村博士によって、文化の多次元的構成として捉えられた。

文化の三次元に內面的統一をあたえるものは、その主體たる人間の存在の仕方であるが、杉村博士はその具體的なあり方を歴史的文化、とくに世界觀と倫理を帶同した人間に卽して捉えようとした。文化の主體的統一は歴史的文化に重心をおいて實現する。この視點から經濟文化を意義づけることが、博士の問題となる。そこに二つの重要な提説がなされた。

第一は、經濟學的認識の歴史的展開のあとを、世界觀と結びつけて解釋することである。世界觀と方法論と經濟學説を統一的に理解しようとして、經濟學史の哲學とも稱すべき理論が展開された。『經濟學方法史』（昭和十三年）は、『基本問題』とともに、それを示している。

第二は、歴史的な經濟文化、とくに資本主義を經濟倫理と結びつけて理解しようとする。その『經濟倫理の構造』（昭和十三年）は、その企圖の生んだ成果である。これは左右田博士の『協同體倫理』の構想をより現實的に展開したものであるとともに、資本主義文明の構造についての獨自な見解を開陳したものでもある。獨自なという意味は、資本主義における運命と合理との絡み合いを、マキァヴェリズムの新解釋にたって究明し、資本主義より社會主義への移行を意義づけようとしたということである。ウェーバー、シュンペーター、マルクスなどの資本主義論に伍して、別個の提説を企てたものである。

杉村博士は『經濟倫理の構造』脱稿前後より、東京商科大學を去って實業界へ轉出、終戰後、母校の講師となって、經濟哲學の講座を擔當したが、昭和二十三年病沒した。その理論體系は、その『基本問題』と『倫理の構造』によって、その骨組みを明らかにしたが、その後の經濟社會の變轉と經濟學の躍進とを思うとき、杉村學説の新展開を要求したいいくたの場面がある。

杉村博士が殘した學説を、その『倫理の構造』の線に沿って進展せしめているものに、武藤光朗（『經濟哲學』昭和二十二年）があり、その『基本問題』と『方法史』の問題を中心として伸張せしめているものに、馬場啓之助

（『經濟學の哲學的背景』昭和二十六年）がある。しかしいまだ經濟哲學に第三の體系と目しうるものは形成されていない。（馬場）

附記
紙幅の制限のため意をつくしえなかった。詳しくは拙稿「經濟哲學における杉村學說」（杉村記念會編『經濟哲學の諸問題』昭和二十五年）および「經濟文化」「左右田喜一郎」（東洋經濟新報社『經濟學大辭典』近刊）を參照されたい。

二

1　山內哲學

大正十年六月、滯歐中に東京商科大學助教授に任ぜられた山內得立博士は、大正十四年から昭和六年までは教授として、それ以後昭和十八年までは兼任教授（本官、京都帝國大學教授）として、實に前後二十年餘にわたって學生の薰陶と育成とに努力し、學問的にも人格的にも深い影響を殘した。太田可夫、藤井義夫、高橋長太郎、馬場啓之助はその門下である。のみならず博士が福田德三博士、三浦新七博士、左右田喜一郎博士などによって釀成せられたいわゆる一橋アカデミズムの學風——それはたとえば神戶經濟大學（現神戶大學）の著しく實用主義的な學風と比較して全く對蹠的である——に寄與した功績もまた沒しがたい。

山內博士は、周知のごとく、西田幾多郎博士の高弟の一人であるが、その哲學思想は決して西田哲學の後塵を拜するものではなく、全く獨自の立場に立っている。それは博士の體系に對する強い關心と、歷史——とくに古代ギリシヤ哲學史——に對する深い造詣と、そして藝術に對する銳い審美眼とに由來するものと考えられる。博士は考える人であるにもまして見る人なのである。

あたかも左右田博士がハイデルベルグのリッケルトに深く傾倒して、新カント學派の方法意識を身につけて歸朝したように、山內博士はフライブルグのフッサールに師事し、現象學派の問題意識を自家藥籠中のものとして歸朝し、當時わが國においてなお多くの追隨者ないし同調者を見出していた新カント學派の哲學に對して、一九二〇年代から次第に世界の哲學界の主流となりつゝあったこの新しい哲學のもつ本質的意味を宣揚し、わが國に

おける現象學の勃興に對する先覺者としての、またその指導者としての役割を演じた。すでに前節に關説された本多謙三氏の現象學的方法による經濟哲學の解明の企圖も、まさしくかゝる時代的潮流に棹さしたものと言うべきであろう。

山内博士の最初の研究成果は『現象學敍説』（昭和四年）である。「恰も人が花に於て美を見ることは花について事實を穿鑿することによつてではなく、花に於て直ちに美を見るのであるが如く、現象學的研究も亦特殊なる眼によつて特殊なる事象を見ることを基礎體驗としてゐるのである。現象學はこの體驗を記載し分析することに中心的なる仕事をもつてゐる」限りにおいて、現象學はすぐれて「眼の人」であるところの山内博士に最もよき理解者を見出したと言うべきであろう。この著書は序文にも明言されているごとく、フッサールの『純粋現象學及び現象學的哲學の理念』よりも、より初期的な『論理研究』を主たる手懸りとして書かれ、またマイノングの對象論的な考え方も導入せられていて、單なるフッサール現象學の忠實な解説ではない。それは現象學を通じて哲學することの本源的な意味を明かにしようとしたものであって、フッサールよりもむしろ山内博士自らの現象學と稱すべきものである。そしてそれはその後に刊行された現象學に關する數多くの類書のなかにあって、わが國における現象學研究の最高水準を示したものと許することができる。

現象學から出發しながら、それを越えて獨自の體系を構想しようとする山内博士の努力は、その主著『存在の現象形態』（昭和五年）において結實した。こゝでは存在の三つの形態、すなわち存在と非存在との關係方式たる對立、矛盾、差異の三者に對應するものとしての存在の可能的、必然的および現實的形態が、現象學的方法を驅使しつゝ、周到な論理をもって究明せられている。その立場は現象學的であるよりもより存在論的であって、この書によって山内博士はすぐれた獨自の存在論的哲學の體系を樹立したものと言いうるであろう。博士の第三の著作たる『體系と展相』（昭和十二年）は内容的にはむしろ體系への展相であって、こゝに集錄せられている諸論文は、博士の現象學研究からその體系樹立への經過を物

語っている。

昭和六年四月、山内博士が東京商科大學から京都大學へ轉任し、哲學史の講座を擔當するや、博士の主たる關心は古代哲學史の研究にむけられた。そして『人間のポリス的形成』(昭和十四年)、「ポリスの倫理思想」(岩波講座『倫理學』所收)、「メガラ學派の κυρεύων λόγος」(『一橋論叢』三ノ二所收)、「一者・コスモス・都市」(『一橋論叢』九ノ一所收)、「形成と生成」(『一橋論叢』一五ノ一所收)、「場所とコーラ」(『哲學研究』三〇所收)、「アリストテレスの自然」(山内、藤井編、『哲學史研究』一所收)、「アリストテレスの論理」(『理想』一九五所收) など數多くの論文が發表せられたが、その集大成とも稱しうべきものは博士の大著『ギリシャの哲學』(上卷、昭和十九年、中卷、昭和二二年) であって、そのなかにはタレス以後プラトンにいたるまでの古代ギリシャの哲學思想が詳述されている。しかしこの書は決してギリシャの哲學者たちの通俗的な列傳ではなく、またその單なる文獻學的-歴史的研究でもなく、むしろこの書の「序論」および「ロゴスの諸展開」――「神秘的精神からロゴスへの明化」、「抒情的精神からメトロンへの形成」、「僭主的精神からノモスへの克服」――から明瞭に讀みとりうるように、ミュートス、エポス、ノモスの諸領域を通じてギリシャ哲學の發展を歴史的に究明しつゝ、その基底をなすところのロゴス的な哲學する精神を明かにしようとしたものである。そしてその限りにおいて、博士の關心がギリシャ哲學の文獻學的-歴史的吟味よりも哲學的-體系的究明に置かれていることを知りうるであろう。このことを雄辯に物語るのは、プラトン研究にあてられている『ギリシャの哲學』の中卷であって、この尨大な著作において周匝に論ぜられている形相と形成との區別の如きは、博士の獨創的な解釋を示すものとして特筆さるべきものであろう。博士は現在アリストテレスを主題とする下卷の執筆に沒頭しつゝある由であるから、その成果は期して待つべきものがある。

山内博士はその後再び體系的な問題にむかい、『實存の哲學』(昭和二三年)、『生成・創造・形成』(昭和二五年)などをその成果として發表した。これらは量的には既述の諸著に比較して小篇に過ぎぬけれども、質的には決し

て然らず、むしろ博士が倦まず續けた長い研究生活の歸結として、絶えず成長していったその哲學像のプログラムを示唆しているように思われる。というのは現象學的研究から出發して、最初に根をおろした存在論的哲學がギリシャ哲學――とくにプラトンやアリストテレスの哲學――によってより深化せられ、それが戰中戰後のわが民族的悲劇の體驗を通してさらに成熟し、實存哲學のうちにその思索が結實したものとみうるからである。それは「無からの創造」を説く宗教の立場と「存在の生成」を問う自然科學の立場とから區別せられ、哲學を神と自然との間にある「人間の形成」のうちに觀取し、そこに實存への道を拓こうとするものである。そして現象から存在へ、存在から實存への道がまた生成から形相へ、形相から形成への道と相覆うものであることはまことに興味深い。われわれはこゝに山內哲學とも稱しうるものが形成せられつゝあることを感じる。果してこの期待は博士の近著『存在と所有』(昭和二八年)によって滿されることになった。しかしこの著書を簡單に解説することは不可能であるのみでなく、それに論じ及ぶことはわれわれの主題を逸脱するおそれがある。それについては別の機會を待ちたい。

2 二つの哲學者像

『現象學敍説』のなかに次のような一節がある。

「新カント派の哲學は現象學派の哲學と相並んで現代の思想界に於て――殊に現代の獨逸哲學界に於て事實上二つの大なる對立をなしてゐるといふのみでなく、それらはまた歷史的に人間の思想體系の二つの模範的なる典型を代表してゐるのである。放膽なる概括を用ふることが許さるゝならば古代より現代に至る人間の思想の歷史はこの二つの思想の流れの鮮かなる對照によつて彩られてゐたとも言ひ得るであらう。或人は、哲學する人はプラトン型として生れるか、アリストテレス型として生きるかの孰れかであるといつた。ギリシャの昔に於てプラトンとアリストテレスとが對蹠的に對立してゐたやうに、獨逸に於てもカントはライプニッツと互に相容れない思想型を示しつゝ相對峙してゐた。」(一七頁)

このことは單に哲學の方法ないし立場についてのみでなく、人間そのものの在り方についても妥當するように

思われる。そして序言においても觸れたように、わが學園がこの國においてこれらプラトン的とアリストテレス的二つの型を代表する典型的な哲學者、左右田、山内の兩博士をもちえたことは感謝さるべき僥倖と言わねばならぬ。

嚴密に言って左右田哲學がプラトン的であるということとには異論があるかも知れぬ。なぜならそれはプラトン的であるよりも、よりカント的であり、カント的であるよりも、より新カント派的だからである。けれども左右田博士が當爲と存在との二世界主義的相剋を「極限概念の論理」によって克服しようとしたことは、あたかもプラトンがイデアと現象との超越を「分割の論理」によって解明するために、かれの後年の努力を傾けたことと思想傾向を同じくすると言いえないであろうか。のみならず私にとって興味があることは、博士の人となりがプラトンに類似しているように思われることである。

山内博士はかつて『一橋新聞』に寄せられた左右田博士の追悼文のなかで、「生活において人間において博士からうけた私の印象は一言にして言へば高いといふことである。博士の學問は博いといふよりもむしろ高かつた」と書いているが、筆者自身がこの畏敬すべき哲學者から感得したものもこの高さ以外のものではなかった。筆者が左右田博士に親炙しえたのはその逝去一年前の最後の讀書會においてであって、博士その人について語りうるためにはその期間はあまりに短かかったが、震災後のあの經濟的破局を體驗し、その上痼疾に苦患しつゝあった博士が、常人ならばおそらく論理によってよりも生理によって打ち砕かれたであろうあの高さを最後まで堅持したことは實に驚嘆に價することであった。このことは博士が好んだ高き思想によってのみでなく、生れながらにして高き人であったことを想わしめるのである。この點においても博士はきわめてプラトン的であったといえる。なぜならプラトンは、周知のごとく、「神の如く」高き人であり、またかれの「第七書簡」からも明かなように、シケリアにおけるかれの政治的革新の企圖が挫折した後も、その終焉の日までかれの高さを見失わなかったからである。

左右田博士がプラトン的であるに對して、山内博士は

より高い程度においてアリストテレス的である。というのは左右田博士は、叙上のように、プラトン的であるよりもより新カント派的であったが、山内博士は現象學派的であるよりもむしろよりアリストテレス的であるからである。この國において博士ほどアリストテレスの眞の精神を自らの體系のなかに生かした哲學者は稀であろう。このことは博士の主著たる『存在の現象形態』が主題的にアリストテレスの『形而上學』を想起せしめるからではない。「客體的なるものに依倚することによってその存在性を描出」するという態度そのものが、まさしくアリストテレスの立場に外ならないからである。そしてまたこのことが博士をして現象から存在へ、存在から實存への道を可能ならしめたとも言えるであろう。

さらに左右田博士が高き人であったに對して、山内博士はなによりも中の人である。博士の溫容に接したことのある人はこのことを肯定するに何の躊躇もしないに違いない。このことも博士がアリストテレス的であることの證左となる。もちろん「中」ないし「中間的なるもの」を尊重することは一般にギリシャの傳統的な思想であり、暴慢を憎み、節度あることを願うのはかれらの生活の規範であって、そのことはギリシャ人にとって存在のひとつの原理的なる規定とさえなっていた。けれどもこの「中」の思想を自己の哲學體系の中核としたのはアリストテレスであって、かれの論理が「メソン（中）の論理」と呼ばれ、かれの倫理が「メソテース（中庸）の倫理」と言われるのはその理由からである。博士が好んで語る「アナロギアー（類比）の論理」なるものも、比例が中項によってその機能を全うしうるように、「中」の思想によって支えられている。アナロゴスが單に類推ではなく、現實的存在の論理となりうる所以のものも、このメソン（中）を基體とするからである。從って博士がロゴス的にもエートス的にも中の人であることは理論的な根據をもつ、とさえ言えるのではあるまいか。しかし中庸は決して凡庸を意味するのではなく、事實はその反對である。なぜならばアリストテレス的に言えば、存在論的立場から中間的であることは、價値論的立場からは極頂的なのだからである。

ところでこの天才的な二人の哲學者がわれわれの學園

に殘したものをわれわれは如何に受容すべきであるか。

左右田博士が經濟哲學の領域において何を爲しそして何を爲さなかったか、またそれが後繼者たちによっていかに引き繼がれたか、はすでに語られた。山内博士が一橋におけるかれの仕事を委ねた弟子は太田可夫と藤井義夫とである。太田は體系家としての博士の精神を受けついで、十七世紀から十八世紀にかけてのイギリスの經驗論哲學のなかに社會哲學の成立とその體系を見出そうとし、藤井は歴史家としての博士の仕事に卽して、古代ギリシャ哲學のなかに歴史的なものと超歴史的なものとを見わけ、それを自らの體系構成の緒としようとしている。そして博士からかれらが受けつぎそして、かれらの研究を支える指導理念となっているのは方法的にはなによりも zur Sache selbst!（フッサール）であり、内容的には ἡ νοῦ ἐνέργεια ζωή（アリストテレス）なのである。（藤井）

（藤井、馬場・一橋大學教授）